

歴史講座「大久保地区の中世」 ～「羽根倉道」とさいたまの「鎌倉街道」～

- ◆日時：令和3年11月12日（金）10時～11時30分
- ◆会場：大久保公民館 体育室
- ◆講師：青木 文彦氏（さいたま市文化財保護課長）

●要旨

I 「羽根倉道（はねくらみち）」とは？

まず、羽根倉道の定義について、『浦和市史通史編1』（1987年）から見ていきたいと思えます。

そこでは、「上つ道の久米川宿周辺で東へ分岐して、下野国へ向かう道を、『羽根倉道』という。中つ道とも呼ばれ、これが足立郡を通過する。羽根倉道は、浦和市域を通過して、下野・奥州と武蔵国銜を結び、かつ鎌倉へ通じる重要街道であった」という位置づけがされています。

久米川宿周辺で本道から分かれた道があって、栃木県を経て、東北地方、奥州へと通じていく道筋が「羽根倉道」としてされており、鎌倉街道の重要な路線と位置づけています。

しかし、「羽根倉道」のルートには色々な見解があります。（☞資料①）

阿部正道氏の「鎌倉街道について－その分析と遺跡－」（1968年）によると、「羽根倉道」は、久米川から坂下、与野、岩槻を経て、東北へ向かう奥大道と接続する道であることが示されており、柳瀬川の北側に描かれています。

一方、『浦和市史通史編1』（1987年）では、大和田（新座市）、志木、宗岡、羽根倉を渡って、下大久保、与野へ通じる道とされており、柳瀬川の南側となっています。

また、『与野市史通史編1上巻』（1987年）では、柳瀬川の北側・南側の両方に描かれています。そして、岩槻方面ではなく、与野からまっすぐ北へ向かうルートとなっています。

「羽根倉道」を考える上での問題は、大きく2つあると思います。

まず、「羽根倉道」に相当するルートが複数あること、そしてルート設定の重要ポイントである「与野町」の成立は江戸時代初期であり、鎌倉時代に遡って考える場合には問題があると言えます。

次に、「羽根倉道」の「鎌倉街道」としての呼び名が複数あるということです。『浦和市史』では、「中つ道」と呼ばれていますが、様々な史料を見ていくと、「奥州街道」という言い方もされています。

II 「鎌倉街道」とは？

「羽根倉道」を考えるうえで、まず、「鎌倉街道」について整理していきたいと思えます。

「新編武蔵風土記稿」（1804～1829年）に、「鎌倉街（海）道」という地名が残っている場所がいくつか示されており、江戸時代の段階で、「鎌倉街（海）道」の伝承地が複数あったことが分かります。その複数ある地点を一筆書きで結ぼうとすると、必ずしも一直線にはならず、一つの道筋ではないのだろうと想像できます。（☞資料②）

また、与野町の「鎌倉海道」は、まさに「羽根倉道」を指しており、江戸時代の伝承では、与野町を羽根倉道が通り、それが鎌

倉海道であるという理解が地元にはあったということが分かります。

しかし、疑問点もあります。

まず、江戸時代に鎌倉街道と呼んでいることは分かりますが、その道が鎌倉時代の道であるのかは定かではありません。

また、国道級の「鎌倉街道」が、渡場の一つに過ぎない地名を冠して「羽根倉」道と呼ばれるのはなぜか、ということです。

そこで、近年の「鎌倉街道」研究を見ていくと、「鎌倉街道」という呼び名は、江戸時代に由緒ある古道と考えられた道筋に付けられた、となっています。つまり、「鎌倉街道」の言い伝えがある道が、ただちに鎌倉時代にあった道であることにはならないということです。「鎌倉街道」という言われ方がされていたとしても、それぞれの道としてののはたらきや移り変わりを考えることが大事であると思います。

Ⅲ 「羽根倉道」を考える

実は、史料において「羽根倉道」であると呼ばれている場所自体は、そんなに多くはありません。明治時代の初めに埼玉県によって刊行された「武蔵国郡村誌」(1953年)には、「与野町」

「上峯村」「上大久保村」「下大久保村」に「羽根倉道」があると記述されています。つまり、与野町→上峯村→上大久保村→下大久保村を通る道筋が「羽根倉道」と呼ばれていたことが分かり、そこから羽根倉渡を渡っていくことが読み取れます。(資料③)

しかし、「羽根倉道」の道名が付いている範囲が、与野町から下大久保村までなのはなぜか。また、国道級である「鎌倉街道」が、



最終目的地ではない(通過点の一つにすぎない)「羽根倉」道と呼ばれたのはなぜか、依然として疑問が残ります。

そこで、さいたま市内だけで考えるのではなく、対岸側も見ていきましょう。

江戸時代の史料である「新編武蔵風土記稿」を見ると、宗岡村(現在の志木市)には、鎌倉から奥州へ通じる古道(鎌倉街道・奥州街道)があったと記述されています。(資料④)

また、「武蔵国郡村誌」には、宗岡村から見た羽根倉渡について書かれていますが、「羽根倉道」ではなく、目的地である「与野道」という記述になっています。さらに、逆方向から見ると、「与野道」ではなく、「引又道」(引股町は現在の志木市)と記述されています。(資料⑤)

さらに、様々な史料を見ていくと、「羽根倉道」には、「鎌倉街(海)道」「奥州街道」「大山道」「与野道」「引又道」など、その場所や向かう方向によって、色々な呼び名があることが分かります。

つまり、江戸時代や明治初め頃の人々が呼んだ「羽根倉道」は、羽根倉渡周辺の人々が交通上の重要なポイントである羽根倉渡に通じる道として、「羽根倉道」と呼んだのだろうと考えられます。

では、なぜ国道級の「鎌倉街道」に「羽根倉道」という名前が付けられたのかというと、埼玉県がまとめた『県内鎌倉街道伝承地所在確認調査報告書』(1982)において、この道筋のことを学術的に「羽根倉道」という名前で整理した影響があると思います。先に触れた『浦和市史通史編1』(1987)もこの報告書の後に執筆・刊行されたものであり、研究上の概念として、東北地方まで通じる全体の道筋を「羽根倉道」と呼ぶことになったのだと考えられます。(資料⑥)

最後に、「羽根倉道」を歴史的にどのように捉えるべきかに関して、大切だと思う視点について、いくつかご紹介いたします。

すでに奈良時代には、武蔵国府と大宮の氷川神社を結ぶ重要な道筋であったと考えられます。氷川神社は、奈良時代には、奈良の朝廷から財政的な支えを受ける国家的神社としての位置づけがされていました。

また、武蔵国府と足立郡家あだちぐうけ（郡を統括する役所）を結ぶ道であったとも言えると思います。大久保地区周辺には、奈良時代初めの寺跡や遺跡の密度など考古学的にも郡家があった可能性が高いと考えられます。

また、戦国時代においても、北条氏が支配した小田原と重要拠点であった岩付を最短距離で結ぶ道として位置づけられています。

豊臣秀吉が小田原の北条氏を滅ぼし、天下統一を完成させた後、岩付から府中へ向かったことが分かっており、その途中、羽根倉渡から荒川を渡った可能性が高いと考えられます。（[伊資料⑦](#)）

豊臣政権として、関東や東北地方を支配するうえで、「羽根倉道」の道筋を重要な幹線道として位置づけようとしていたことが分かっています。

江戸時代になると、江戸を中心とした中山道や日光街道などが整備されていきますが、それまでは、「羽根倉道」が由緒ある道だったということから、「鎌倉街道」という言い方もされるようになったのではないかと思います。

※ [伊資料](#)については、別添のPDFファイルを参照してください。

主な参考文献

浅野晴樹 2006 「鎌倉街道の考古学」

小野正敏・萩原三雄編『鎌倉時代の考古学』高志書院

阿部正道 1968 「鎌倉街道について—その分布と遺跡—」

小牧実繁先生古稀記念事業委員会編『人文地理学の諸問題』大明堂

埼玉県教育委員会・埼玉県立歴史資料館 1983 『県内鎌倉街道伝承地所在
確認調査報告』（『鎌倉街道上道』附録）埼玉県教育委員会

竹井英文 2013 「豊臣政権と武蔵府中—府中御殿の再検討—」

『府中市郷土の森博物館紀要』第26号 府中市郷土の森博物館

野澤 均 2016 「羽根倉道を探る」『埼玉考古学会設立 60 周年記念シンポジウム 鎌倉街道の風景 発掘でよみがえる埼玉の中世』（『埼玉考古』別冊 10）埼玉考古学会

東村山ふるさと歴史館 2010 『企画展図録 鎌倉街道と中世のみち—中世の狭山丘陵—』同館

宮瀧交二 1999 「北武蔵地域における中世道路研究の現状と課題」

藤原良章・村井章介編『中世のみちと物流』山川出版社